
人生の一步

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の一步

【Nコード】

N1462Z

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

矢神市で生まれた男の子、その子は成長するに連れ他の子とは全然違っていた。親や親戚で嫌われ、遂には施設に入れられた。毎日が嫌な人生、だがそんな彼を引き取りたいとある親子が現れる。親子の間には手を繋いでいる、幼い女の子。それが、彼の一步だった

……

プロローグ（前書き）

とりあえずプロローグです

ブローグ

「おい……あいつ、また事件起こしたぜ」

「ほんと、うちで引き取るんじゃないかったわ」

「いい加減、自分の存在に気づいて欲しい……」

ああ、んなのは知っている

俺がどれだけ迷惑しているかって、胸に刻んでいるんだ

「おいあいつ、今月で暴動事件3回だぜ？」

「マジかよ……あんな小さいなのよお」

「何でも、入学当日に上級生ぶん殴ったらしい……たく、今年で3年のくせに、少しは大人になれよ」

違う、俺は違うんだ

俺はただ、あの時パシリにされていた子を助けただけなんだ。なのに……なのに……！！

拳を強く握ったが、じわじわと中で感じる

赤く、温かく、又メリ気がある……血だった

アア、何で俺は生まれたんだろう？ 何で俺はこんなに嫌われてんだろう？

「……………」

友にも嫌われ、親にも嫌われ、愛されない存在となっていた自分
いつそ、楽に死のうか？

鏡に写る自分が情けなく、とても惨めに思える

「龍哉君、龍哉君」

先生が呼んでいる。何だろうか

ついに俺は捨てられるのか？ いや、これも人生なのか……
次の事がわからずとも、俺は先生の所に向かった

「龍哉君、君の里親が見つかったよ」

「……………俺の？」

何が起こったかわからず、手を取られ外に出た
外は遊び場だが、賑やかな皆は静かになり俺を見ている

「君が……竜宮時 龍哉君かな？」

「は、はい……アンタは」

俺を見下ろしている大人達

だが、それよりも気になったのがその大人達の手を取っている女
の子だった

髪は長めで、目つきがちょっと悪い女の子

「僕達は今日から君の親だ。君は今日から、刑部 龍哉だよ」

「本当、何か不思議な感じの子ね……ねえ、絃子」

「う、うん……」

頭に手をのせられ、無理やり撫でられる

何が起こっているんだよ……俺には全然わかんねえ

だが、これが人生の一步だった事はこの時の俺は気づかなかった

「――部！！ 刑部！！ 起きないか、刑部！！ まだ授業中だぞー！！」

「んー…… なんだよバアちゃん、今日は日曜日だぜ？ 全くおつちよこちよいだな」

「私は今年で二十歳だ！！！！ いいから起きないか！！」

はあ、久しぶりに昔の夢を見たな

目を開ければうるさいおばさんがぎゃーぎゃー言っていた。そうか、まだ授業中だったな

「全く、タツはのん気でいいな。だからテストでも私に負けるんだよ。バーカ」

「ああん！？ たしかに此間のテストはお前の方が上だったが、その前のテストの国語は、俺の方が上だったぞ！！ 絃子！！」

「ほお！ 私は昔の事を忘れるのでな、未来に進んだ方がいいぞ
ツ！！」

「過去振り返ってみろ！！ テメエのいままでした事、スゲエから
な！！」

「！？！？ 死ね！！！！ タツ！！」

「テメエが死ね！ 絃子！！」

あれから2年の月が経った……
人生の一步を踏んだ俺は、あれからも成長し続けている
そう、今の俺は刑部 龍哉だ

プロローグ（後書き）

感想をください!!

第一話 龍の本能

「おら！！」

『ドゴ！！』

「がはっ！？」

「食らえ！！」

『ドゴ！！』

「げふっ！？」

醜い音

そして、その後に聞こえる声

「おいおい、この俺に喧嘩売ってそんなんかよ？ ヨッワ！！」

「ぐっ……！！ 化け物が……」

「な、何て奴だ……」

その声を最後の、二人は地面に倒れた
弱い弱い弱いだよ！！ たく、カスが……

あの時から時間が経ち、俺は中学三年生になっている

人生に時計とは早い。あっという間に時間が経ちまう
その場を離れて、教室へと向かう

「タツ……また喧嘩したのか」

「仕方ねえだろ。アッチから売ってきたんだから」

「全く、心配させる奴だ……人の気も知らないで」

途中、別のクラスの絃子が何故か俺のクラスに待ち伏せしていたく……テメエは俺のお袋かよ。美人のくせに最後尾の席は、俺の特等席

「大丈夫だ、親父たちには迷惑かけねえ。もちろん、テメエにもな」

「……本当、昔からお前は……」

「いいから戻りな。俺はこれから特別授業があるからな」

「どうせ保健室でサボるんだろ。そうはさせない」

「……………」

なんでわかったんだよ

何でこいつは、俺を気に掛けるんだよ。変わった奴……

「そんなにストレス溜まってんのなら、何かスポーツでもすれば？」

「スポーツ……ねえ」

放課後、あいつは友達と帰ると言って別々に帰っている

「何かスポーツでもすれば？」

……俺が？ あんな律儀なスポーツをねえ
殴れるスポーツ。ん？ たしかダチから聞いた話によれば、すぐ
近くの隣町にボクシングジムがあるらしいな……

歩いて5分か……行ってみるか
帰り道を途中で横に入り、隣町へと

「本当にあった……『鴨川ジム』ねえ」

古いそうだなあ

扉を開き、無言で入る

「コラァー!!」

「いて!？」

目の前にはとても酷い形相をした、爺が俺を杖で叩いているんだよ!？」

「ちゃんと挨拶せんかボケエ!?!」

「ちっ!! なんだよこいつ……」

「見たところ入門希望者のようじゃな。まあ、最初は大目に見てやる」

上から目線かよ

つか待て、俺はだま入門するとは一言も言っただけぞ!! 相手にしてやれるか

俺は爺を無視し、リングへと向かった

「お、おい!! 何リングに上がろうとしているんじゃない!!」

「うるせえ、おい!! 誰か俺の相手になってくれ!!」

グローブをはめ、とりあえずボクサーらしいポーズを取るすると……

「面白れえ、俺様が相手にしてやるよ」

「ちょ!?! 鷹村君!! 君、一応減量中なんだよ」

「いいじゃねえか、ちよつとぐらい。生意気な後輩をシメルぐらい

な」

大男がリング上へと上がった

デカイ……けど、デカさだけが勝負じゃねえ

「よし、来いよ。ゴング無しだ。先ゆず「あつそ」……!?」

瞬時に懷に潜り、男は驚いている

こんな事で驚くのかよ、たく面白くねえなあ!!

最初は弱めの拳で力量を測ってやるよ

けど……

「シッ!!」

『ドン!』

「ぐっ!」

『ドン!』

「またか!!?? ぐを!」

固いな……防御はまあまあだな

だが崩れば俺の優勢。このまま攻めるのみ!!

「あの鷹村が……押されているだろ!」

「（何て野郎だ……!!?? こんな早いジャブ、初めてみたぞ。まだプロになって浅いが、中々やるじゃねえか）」

「シッ！ シッ！」

『ドン！ ドン！』

「ぐっ！！」

よし！！ 奴の防御に隙間が開いた！！ このまま一気に
左腕を引き、右足を軸に……

「シッ！！」

『ドン！！……！』

「！？！？ ぐぐ……！！！」

「何！？ 今度はストレートじゃと！？ しかも、右のジャブで鷹
村のガードに隙を作りおった！！！」

そんな驚くことじゃねえぜ、爺
しかし、コイツ本当にボクサーなのか？ 弱すぎるぜ

「おらああ！！！！！」

『ドッゴーーン！！！！』

「！？」

し、しまった……

「奴め、油断してガードを下げおつたな。鷹村のアップーを食らいおつて」

い、いてえ……顎がいてえ。なんて破壊力だ
目線をあいつに移すと、奴の目はマジになっていた。しかも、光
っている

怖い……怖い!!

「今の凄い効いたぞ!! もう一発!!」

また来る!!

避けなきゃ……避けなきゃ

いや、避ける事はねえ！！ 何弱気になってるんだ俺！！
向かい打つ！！ こんなんじゃ、絃子に笑われちまう！！

『ドゴーン！！』

「ぐ、がはっ！？」

俺ではなく、今度は奴が食らった
負けられねえ、こんな試合で負けられるか

「み、右ボディブロー……じゃと！？ 初心者のはずなのに、何と
いう技術」

『ガラガラガラ』

「ああ、疲れた」

「お、スパーやってんのか。どいつと鷹村さんやってんだ……！？」

「どうしたあ、木村……はあ！？ た、鷹村さんが押されている
！？ 誰に！？」

「さっき来たばかりの、入門希望者にじゃ」

「「何……！？」」

さて、そろそろ終わりにさせてもらおうか！
このつまらない試合に、終止符打ってやるぜ

「負けられるか――！！！！！！」

「こつちもなんだよ――！！！！！！」

激しい打ち合い

とりあえず、力を振り絞っての近距離のぶつけ合い

『ドゴ！ ドン！ ドゴ！！ ドーン！！』

「おいおい、あんな間に入ったら死ぬぞ」

「何てやつだ……あの人に付いていつている」

「ワシには見える。あ奴らの後ろには、鷹と龍が……」

これで本当のお終いだ！！！！

テメエの顔面に、浴びさせてやるぜ！！

今度はさらに力を入れ、右全体を放つ

「うおおおおおおお！！！！」

だが、それはお互いそうだった

クロスした腕は、一切邪魔されずたた目標へと向かっていった

『ドオオオオン！！』

そして、互いの顔面へと減り込んだ

「……久しぶりに、燃えたわい」

「それじゃあ、明日から来てね。龍哉君」

「ういっす!!」

あんな奴と試合できたんだ……結果は引き分けだったが、いづれ

あいつを超えてみせる

ボクシングって、こんなに楽しいんだな
絃子、俺は今嬉しいよ

第一話 龍の本能（後書き）

おまけ

「ただいま」

「おう、おかえ……タツ……！！……だ、大丈夫なのか！
！？？ その顔！？」

「あ、ああ。本当、お袋かよ……そうだ、絃子」

「な、なんだ」

「俺、ボクシング始めたから」

「……………は？」

第二話 必殺バカ、グレ男グレ太郎

「おらあああ！！！！」

『ドーン！！！！』

いい音がジム内に響き渡る

初めてもサンドバックを叩いた……気持ちいな
まさかここまで軽いとは、正直驚いたがいいか

「マジかよ……。あいつ、鷹村さん並みの破壊力じゃねえか」

「いや、下手すればそれ以上だ」

「（なんという技術者じゃ。まずはあの足腰は並み大抵じゃ出来な
いじゃろ。鷹村並みか……いや、あれは『力』の入れ方が上手いん
じゃ）」

たく、何ジロジロ見てんだよ

そういえば、まだあのリーゼント野郎が来てないな。面白くねえ
そしてまたもサンドバックを打つ

「シッ！！！」

『ドーン！！！！』

グローブを外し、隅っこのベンチに背を掛け、今は休憩時間
すると、二人の男が俺に近づいてくる

「おいお前、たしか刑部 龍哉っつーんだろ？ 俺は木村 達也だ。
いやいや、名前が偶然なんてな」

「俺は青木 勝だ。俺たち一応プロボクサーだ。まあ、まだ一回し

かやってないがな」

「はぁ……」

個性的な人たちだ

それに、何処からか臭う。まるで、リーゼント野郎と似ている

「ああ、名前が一緒なら俺の事『タツ』って呼んでください」

「おう！！ これからもよろしくなタツ！！ って、話は変わるんだが……」

な、なんだ

急に二人は俺を囲みだした。そしてヒソヒソ声に

「お前、あの鷹村さんと同等だよな？ 勝てそうだったか」

「あ、ええ…… もうちよつとボクシングの練習積みれば、行けるかと」

「青木聞いたか！！ あいつに勝てるぞ！！ 負ける姿がやっと見える日も近いぜ！！」

「おうよ木村！！ おいタツ、お前に俺らの技を伝授させてやる！！ だから、あの化け物に勝ってくれ！！」

俺に縋りより、嫌な顔で俺に頼ってくる

そんなに勝ちたいのかよ……だが、これは好都合。さらに強くなれる

その日から、俺と木村さん達とツルムようになった

鴨川 side

むっ、今誰か勝手にリングを使っておるのか
あれは……青木に木村に、龍哉かぁ

「おうし!! まず俺のスタイルをよく見てろよ」

「はい!!」

「行くぜ!!!」

ほぉ、木村の奴。あんなに早く左右を動かなど、こないだの試合

が刺激になったようじゃな

アウトボクサーとは、たしかに体力の減りは倍になるが、リズムを刻み相手を翻弄する

インファイトの龍也には、それがどういう結果になるか……

「ほらほら、どうした！！ 動きに着いてこれてないぜ！！」

「なら……こんな感じっすかねえ」

「「「！！！？」「」」

『ツツ、スツ』

あのステップ！？ まさに、完璧じゃ！！ 自分のリズムを刻んでおる

あれは木村から真似したんじゃない、自らの頭でシュミレーションして完成したアウトボクサースタイルじゃ！！

何という、男

「はあはあ……ぱ、パス」

「情けねえ。俺が揉んでやるぜ」

次は青木か

青木はボクシングをよく知り尽くしている、研究家。それが、龍也に効くか……

「オラア!!」

「は!?!」

『ドン!』

初っ端から、『ダブルパンチ』か。少々手加減せえ

あんな動きを初めてみた龍也は、ガードしたままずっと固まっていた

「ん? もう気絶した」「マウンテンパンチ」!!」「うお!?!」

『ドム』

「ぐ、ぐ!!」

何と、『ダブルパンチ』の縦型が。ボクサーが一番注意するのは顔面

右手は顔面に向かい、片方はボディ

下手すればカウンターじゃが、青木が油断したお蔭じゃ

青木は顔面は防いだが、ボディには多大のダメージを食らったろ
たしか、『山突き』じゃったな

「はあ……はあ……」

「あ、あの先輩ら……」

たいした体力じゃのう。体力はまさに、セコイとしか言えんわだが、こいつあ日本に居座る器じゃない。楽しみじゃ

第二話 心配性のおかん？

「おい絃子！！」

「何だ？ 急に大声出して」

たく、今は休み時間だつてのに……

クラス違うはずなのに、タツがわざわざ私の所に来るなんて……
珍しいな

嬉しいわけではないぞ

「今度よ、青少年ボクシングの大会があるんだ！！」

「……まさか、その大会に出るのか？」

「おう！！ ぜってえ優勝してやる！！ 一日に二試合なんだが、
今度の土曜から月曜までだ。見に来てくれるよな？」

そんな事が……そりゃあもちろん

「嫌だ」

「早くも返答するなボケエ！？ 来いよ絶対に！！」

タツはそのまま怒りながら、出て行つた

試合か……タツがあんなに張り切るなんて数年ぶりに見たな
……行ってやるのかな

だけど、タツがやられる所なんて見たくない

けど……

その時、私の頭は瞬間に解決策を出した

そうだ！！ 今日タツの通っているジムを見学しよう
そうすれば、実力がわかるってもんだ

「ふふふ……」

「絃子さん……何処から出したの、そのカメラ」

龍哉 side

「シッ！ シッ！」

『ドンドンー！』

「ぐっ！？ がはっ！！」

「そこまでじゃー！！ 龍哉……かなり調子がいいじゃないか。この
まま行けば、優勝間違いないじゃろ」

スパーの相手は腹を支えながら、休憩室へと向かった

だんだん強くなっている……このまま行けば、リーゼント野郎にも勝てる

「当たり前だ爺。こいつは俺様が認めた宿敵なんだからな」

「来たんスカ……リーゼント」

「俺様は鷹村だ!! 覚えておけ……で、タツ」

いきなりあだ名呼びかよ

まあ、それはいいもんだな……鷹村さん

「大会なんてお前にとっちゃ楽勝だろ。全部k oで勝てよ」

「んなのはわかってる。テメエに勝つまで、俺は負けねえかな」

「ふん。いいから次はミット打ちじゃ」

雑魚なんか構ってられるか

狙うは一直線!! 最短距離で、俺が『最強』って示してやんぜ
汗を拭き、会長と向き合う

絃子side

さてと、とりあえず来たぞ

此処に居るんだよな……タツは？

手に持っている地図を確かめながら、鴨川ジムという目の前にいる

「よし」

『ガラガラ』

「失礼します」

ドアを開け。ジムの中は練習している人だらけだった
熱気に包まれ、冬なのに熱い

「「「おおう！！！？？？」」」

すると、変わった3人組が私を見た
な、なんだ……！？ そんなエッチな目で見るなんて……。でき
れば、タツもそういう風に……って、何思ってたんだ！
3人組は走って、私の前で急停止した

「お、おい！！ 何て美しいんだ……」

「は、はい。スタイルもいいですね…… 此处に来たってことは、誰
かのコレですかね」

「上から80は超えてるぜ……」

何か会話してる

それより、タツは何処なんだ？

周りを見て、中央にあるリングに私の目当ての人物がいた

「ジャブジャブ！ フックが来よるから注意せえ！！！」

「シッシッ！！ 『ビュン！』 ツ！」

ミットを打っている、タツが居た

か、カッコいい…… そうだ、母さん達にも見せよう
カメラを取り出し、タツを撮る

「どうやら、タツの知り合いらしいですね」

「此奴は面白れえ」

「あんな美人の友達居るのか、あいつ」

そういえば、この人達タツの知り合いらしいな
挨拶しとかねば

「私は刑部 絃子です。タツとは兄妹です」

「「なにい~~~~！！?? あいつに妹居るのか~~~~！！??」
「？」

まあ、義理ですけど

すると、大きい男の人が一気にリングに上がっていった
な、なんか嫌な予感

「タツ~~~~！！！！ まさかテメエ、近親相姦かああああ！！！！」
「！！」

「はあああああ！！?? 何言ってんだテメエ！！ つか、急に

「タツを……よろしくお願いします」

「ああ。奴は大物になる。面倒見てやるわい」

それを言い残し、ジムを出て行った

鴨川ジムか……いい人たちを見つけたな

第二話 心配性のおかん？（後書き）

おまけ

「はあゝ。カッコいいな。この写真なんか特に」

「おい絃子！！ 風呂空いたぜ？ 絃子！」

「何か私……崩壊しているな？ いやいや、これはあれだ。うん、あれあれ」

「あゝ。風呂空いたんですけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1462z/>

人生の一步

2011年12月10日17時53分発行